
新世紀エヴァンゲリオン 皆の未来のために

細目了解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン 皆の未来のために

【Nコード】

N5349V

【作者名】

細目了解

【あらすじ】

細目了解のエヴァンゲリオン逆行物第2弾

今回はシンジのみ逆行物ですがセカンドレイ補完委員会委員長と作者が勝手に言っているので、セカンドレイは死にません。

今回はエンディング後から16話終了時に逆行です。

今回の投稿は12月を予定しています。

プロローグ（前書き）

セカンドレイリターンの内容に詰まってきたので気分転換に連載していきます。

プロローグ

目の前に広がるのは赤い海、みんなが溶けてしまった。
今、地球にいるのは碇シンジのみ。

碇シンジの隣にいた惣流・アスカ・ラングレーはさっき死んでしまった。

死に至る病、それは絶望

アスカは赤い世界に絶望をし死んでしまった。

もうすぐ碇シンジにも同じことが訪れるだろう。

しかし、突然目の前は真っ暗な世界になり、そこには碇シンジが好きだった少女、綾波レイと碇シンジのことを好きだと言った渚カヲルがいた。

少年が愛したレイは少年を守るために16使徒戦で自爆したレイであつたが。

「碇君、あなたは何を望の」

「僕の望みはみんながいる世界だ」

「碇君、あなたを過去に戻してあげる」

「シンジ君の望みならば」

「いいの、綾波、カヲル君」

「ええ、あなたを私と彼の力を使って戻すわ」

「ありがとう、綾波、カヲル君」

「碇君、ありがとう」

レイがそう言った途端シンジの体が薄まっていく。

「シンジ君、君には僕とレイの力をあげるよ
頑張ってきてくれ」

「タブリス、レイと呼ばないで」

「わかったよ」

「綾波、カヲル君ありがとう」

絶対にこんな世界にしないように頑張るよ」

シンジはそういつて消えて言った。

「すべてのメーターは振り切れています」

黒いゼブラ模様をした使徒から初号機が出てきた。

「私たちはなんでものに乗っているのよ」

「初号機プラグ内」

「ここは、そうかこのときは僕の勝手な行動で使徒に飲みこまれ
ただ

残りの使徒はあと5体か

絶対にサードインパクトを防いで見せるよ」

シンジは拳を握っていた。

プロローグ（後書き）

初めてみましたがストーリーが全然思いつきません。
少し頑張ってみます。

1話 再来した日常

「ここは、そうか、戻ってきたんだ」

シンジが病院のベッドから降りて言った。

横を向いてみてみるとシンジが愛したレイが座っていた。

「ありがとう、綾波

隣にいてくれて」

それを聞いたレイは顔を赤くしていた。

「碇君が心配だったから」

レイは言う。

シンジはレイがこんなことを言うのを初めて聞いて驚いているが、レイが自分のことをどう思っているか気になり質問した。

「綾波は僕のこと好き」

シンジは自分がとんでもないことを聞いてると思いながらレイの返答を待ってみた。

「わからないわ」

「じゃあ、嫌い」

そんなやりとりをしていたらイライラしたのかアスカが病室に入ってきた。

「バカシンジ、ファーストになに聞いているのよ

ファーストがそんなこと答えるわけないでしょ」

「私は碇君といるとぼかぼかする」

「僕は綾波のこと好きだよ」

そんな大胆なことを言うシンジに驚くアスカと顔を真っ赤にする

レイだった。

「答えは後で言つて」

シンジが微笑んだらレイはどうすればいいかわからず、走って病室から出て行つた。

「シンジ、あんた熱でもあるんじゃないの

あんなこと言つて

ファーストのどこが好きなの」

「うーん、好きになるのに理由はいらないと思うよ」

「まーいいわ

あんたも大丈夫そうだし帰るわね」

アスカは病室から出て行つたが、廊下でなんで泣きながら

「なんでファーストなのよ

私じゃなくてなんでファーストなのよ」

シンジの告白を聞いて初めて自分の気持ちに気がついたアスカだった。

それから2日後シンジは退院になった。

家に帰つてみたら案の定家はゴミだらけになった。

「どうやったら2日でこうなるんだよ」

なれたてつきで2時間で部屋を片付けご飯を作っていた。

深夜、シンジはミサトとアスカが寝てしまったことを確認して、

デリラックの海を展開してレイの部屋に来た。

レイは驚いていた。

突然目の前にデリラックの海が展開されてシンジが来たのだから。

「綾波、少し来て欲しい」

「わかったわ」

シンジとレイはディラックの海に入り消えていった。
それを知るものはいない。

シンジとレイはディラックの海を使いターミナルドグマまで来ていた。

「碇君、どうして……」

シンジがロックに手をかざすとロックが解除され2人は入っていた。

シンジとレイの目の前には、レイの代わりの体がL・C・Lに浮いている。

「いかりくん、わたしがこわい」

カタコトのようなしゃべり方になっている。

シンジはレイに抱きしめていった。

「僕は綾波のことが好きだよ」

綾波は僕のことどう思っているの」

「碇君は私の心を見てくれるの」

「ああ」

「私も碇君が好き」

「ありがとう、綾波」

「ところで碇君、なんで碇君がこんなことを知っているの、それにさっきの力は何なの」

「綾波、僕は今から信じらんないことを言っよ」

「碇君を信じる」

「ありがとう、綾波」

僕は未来から戻ってきたんだ」

「ミライカラモッドテタ」

どうやって」

「サードインパクトが起きたんだ」

「え、私が起こしたの」

「うん、でも僕の意志の力が弱かったせいだよ」

「それでどうなったの」

「人類が滅亡して、僕だけが残されたんだ」

それで綾波とカヲル君の力で帰って来たんだ」

「カヲル君？」

「フィフスチルドレンだよ」

「フィフスチルドレン、フォースもまだなのに」

「いろいろ話すことはあるけど一旦戻ろっ」

「ええ」

「でも、その前にやっとかないといけないことがある」
シンジはそういつてレイの予備をL・C・Lに戻した。

「ありがとう、碇君」

二人はディラックの海を使い地上に戻っていった。

2話 ふたり（前書き）

2話です。

こっちの話しは協力者がいないのと、シンジがヒトの体でアダム
の力を使うのが、ポイントです。

2話 ふたり

シンジとレイはディラックの海を使いレイの部屋に戻って来た。

「まず、僕は使徒の力が使える」

「どうして」

「戻って来る前に向こうの綾波とカヲル君にもらったんだ
ダミープラグがどこにあるかわかる？」

「多分、碇君のプラグに搭載されたと思う」

「わかった、ありがとう」

「ダミープラグをどうするの」

「使用不能にしたいと思っている」

「わかったわ」

「僕はもう帰るよ」

もう遅い時間だし」

時計は深夜2時を差していた。

「碇君、お願い今日はここに止まって」

「綾波、どうしたの」

「今碇君がいなくなるのが耐えられないの」

「でも、明日学校行くとき…」

シンジの服装は制服だったが、鞆は持っていない。

「デリラックの海を使ってとりに戻ればいいわ」
シンジはレイの頭の回転の速さに驚いていた。

「わかったよ、今日は止まって行くよ」
今日帰る事は無理だと感じレイの言ったことに賛同した。

「綾波の家ってベッド一つしかないよね…」
賛同してからまずいことに気付いた。

「問題ないわ、一緒に寝ればいいわ」
さらっと問題発言するレイだった。

シンジとレイは一緒のベッドに寝たが、2人ともそういうことの知識がなかったので、18禁になることはなかった。

シンジは朝五時に起きた
レイと同じベッドで寝たため寝れず、結局二時間ぐらいしか寝ていない。

シンジはレイの家の台所の中を見たが、やかんはあったが、包丁や鍋はなかった。

「しょうがない、コンビニで何か買ってこよう」

「碇君、どこ行くの」

「ちょっとコンビニに」

「一緒に行こう?」

「わかったよ」

「あれシンジに綾波じゃないか
シャッターチャンス」

たまたまいた相田ケンスケに写真を撮られた。

シンジとレイの事は学校で噂になるだろう。

2話 ふたり（後書き）

3話がいつになるか分かりませんが、一生懸命やっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5349v/>

新世紀エヴァンゲリオン 皆の未来のために

2011年11月16日18時03分発行